

## 埼玉県・オハイオ州スカラシップ<語学・大学留学コース>

令和3年度派遣レポート 5月

### 「退寮、表敬訪問」

令和3年度奨学生 塚林光ジョナサン

#### 退寮手続き

フィンドレー大学は原則として特別な理由がない限り、期末試験が終わり次第退寮することが義務付けられています。寮の建物ごとやエリアごとのミーティングで退寮手続きやごみ処理等、寮の片づけについても指示がありました。最長で期末試験の次週の月曜日まで延長することができ、その後は追加で料金を支払う必要があるインターナショナルウェルカムハウスかサマーハウジングに移動する必要がありました。また持ち帰ることが困難なものはフィンドレー大学のクラスメイトや友人に譲渡する、大学に寄付するなど、捨てる以外の処分方法があります。共同生活を行っていた為、所有者不明のものも多々見付き、片付けには丸一日かかりました。

#### 帰国に際して

帰国に際して陰性証明書の提出が義務付けられていたため、留学終了後、すぐ帰国する学生はフィンドレー市内のブランチャードバリー病院にて検査を行いました。荷物などについてはキャンパス内の郵便局から郵送する学生もいましたが、高額になる傾向がありました。日本人留学生の殆どがデトロイトメトロポリタン空港(DTW)を利用し、デルタ航空が運行する羽田-デトロイト間の直行便を利用しました。大学キャンパスから空港まで車で一時間半ほど掛かるため、早めの出発が重要です。移動手段が限られている中、現地の友人が志願し日本人留学生を空港に送迎しました。デルタ航空によると、国際線を利用する場合は離陸の3時間前までに空港に到着し、遅くともフライトの1時間前にはチェックインを済ませることが推奨されています。そのため、離陸の5時間前にフィンドレーを出発することを推奨します。また、デトロイトメトロポリタン空港以外にも、フィンドレーに近い空港としてジョン・グレン・コロンバス国際空港(CMH)があります。直行便はありませんが、デトロイトメトロポリタン空港と比較して航空運賃が安い傾向にあります。

## 表敬訪問

春学期終了後、州都コロンバスを訪れオハイオ州教育省、開発省とジョブズオハイオを表敬訪問しました。オハイオ州教育省では国際言語コンサルタントを務めるライアン・ワーツ氏、開発省では省長を務めるリディア・ミハリク氏、ジョブズオハイオでは国際事業開発部長のジャスティン・コーチャーを前にプレゼンテーションを行い、留学を通して学んだこと、感じたことを紹介しました。ワーツ氏はオハイオ州における外国語教育を推進し、外国語教員に向けたワークショップを開催しています。最近では埼玉県との関係を強化し、姉妹校や教員交換を通して両州の外国語教育を更に強めるべく活動しています。開発省はオハイオ州内企業の輸出や中小企業の支援を行う省庁です。ミハリク氏はフィンドレー大学の卒業生でフィンドレー初の女性市長として活躍しました。ジョブズオハイオは数年前に開発省から誘致部門が民営化したもので、オハイオ州の酒類販売で得た利益を財源として、世界中の企業とオハイオ州を繋げる役割を果たしています。また、ジョブズオハイオは埼玉県・オハイオ州スカラシッププログラムのきっかけを作った組織でもあります。

## ジョブシャドウイング

オハイオ州開発省を訪れた際に省長であるミハリク氏から興味があれば是非ジョブシャドウイングをするようにと提案され、再び開発省を訪れる機会を頂きました。

ジョブシャドウイングとは学生などのための職業訓練の一種で、組織がどのように働いているか、仕事の実態を学ぶ活動です。開発省の輸出・国際業務課の副主任を務めるサラ・ジグラー氏と連絡を取り、6月23日と24日に時間を設けていただきました。開発省では多くの職員が在宅勤務とオフィス勤務の混ざったハイブリッド型の勤務体制を取っており、訪問した2日間共に、オフィスには数人の職員しかいませんでした。話を伺った職員はオフィス勤務よりも在宅勤務の方がより効率的に働くことができると感じていると語り、通勤時間の短縮や家族やペットとの時間が増えたと言っていました。

輸出・国際業務課では輸出のみならず、難民や移民に向けた金銭教育や認可された難民保護組織と連携した支援を行っています。コロンバスには米国でも最大規模のソマリヤ人コミュニティがあり、クリーブランドにも移民によって発生したウクライナ人コミュニティがあります。現在の国際情勢により、多くのウクライナ系難民が受け入れられており、紛争や独裁体制のある地域からも多くの難民が受け入れられています。

初日の夕方にはオハイオ州議会議事堂を訪れ、行われていた台湾使節団に対する歓迎イベントに参加し、合衆国商務省国際貿易局の方やオハイオ州に対する台湾領事と話をすることが出来ました。

二日目にはジグラー氏とのインタビューを行い、ミハリック氏が女性リーダーシップイベントで行ったスピーチを視察しました。ジグラー氏はオハイオ州のワシントンD.C.支部での活動など、長きに渡ってオハイオ州の行政に携わってきました。彼女を含め、多くの職員が誰かの役に立つ、助けになることが実感できるからこそ、仕事を楽しんでおり、やりがいを感じていると仰っていました。インターシップを行っている学生の傾向について伺ったところ、商学部の学生が主に興味を持つと思いがちですが、実際には多くが公共政策に興味を持ち、人々や企業を助けたいという願いがあり、給料よりも、手助けをすることで得られる充実感を重視し、目的達成に向けリーダーとなることを希望する学生が多いそうです。また社会全体の利益を尊重する傾向もあるとのことでした。米国で公務員を志望する学生の考え方を知ることが出来、とても有意義な体験でした。

### ワーツ氏とのインタビュー

ジョブシャドウイングの最中にワーツ氏とオンラインでインタビューする時間をいただき、オハイオ州における外国語教育について話を伺いました。オハイオ州の義務教育では二割、米国の大学においても7~8%の学生しか外国語教育に触れていません。教育で外国語を学んだ学習期間も大半が2年間程度にとどまっています。ワーツ氏は学校の財政に問題があり、より金銭的支援があれば、より多くの外国語教員の採用や必要な教材の購入が可能になると仰っていました。米国において、義務教育は学区内の固有資産税を主要な財源として運営されており、その事によって大きな教育格差を生み出しています。そして十分な資金がなければ他教科を優先しなければならず、学生が外国語に触れる機会を奪ってしまいます。特に日本語教員の不足は深刻な問題で、場合によっては日本語プログラムの廃止を行わなければならないこともあるそうです。日本、特に埼玉県との交流についてお伺いしたところ、埼玉県とオハイオ州の関係を強化する覚書が作成されたことを受け、徐々に教員交換プログラムや姉妹校関係の開設を計画していると仰っていました。フランスなど、他国から教員を招待する際にはJビザ（5年まで米国で労働することができる）を利用した外国語教員の確保を現在行っており、いずれは日本人教師のみならず、学校運営に携わる校長や副校長なども交換する計画があるそうです。しかしオハイオ州教育省では十分な資金が無く、各学区に依存したプログラムに

なるとのことでした。また招待に際して、代替となる教員を確保しなければならず、新たなハードルになることが懸念されます。

最後に外国語教育に携わりたい学生に対して、現役教師や外国語教育協会から学べるものが多くあると紹介していただきました。自分にとって楽しく、生産的な授業がどのようなものだったか思い出すことや、自分にとっての最適な教授法ではなく、学生一人ひとりにとっての最適な授業を考えるべきなど、多くのアドバイスを頂きました。

### 留学を通して学んだこと

留学は他国の文化や言語を学ぶ機会であり、視野を広げ自分の将来に役立てることができる経験です。そして異国での生活を通して学問以外にも多くのことが学べる非常に有意義な体験になります。特に米国の大学では世界の国々からの留学生が沢山いるので、自ずと国際交流をすることができます。また米国の大学では学生に自主的に興味のあること、学びたいことを探し、挑戦することを求めます。留学の前、最中であっても、自分が何をやる為に留学したのか、何を得たいのかを熟考し周囲からアドバイスをもらうことがより実りのある留学に繋がります。またそのために与えられたリソースを利用し、現実とする手段を見つけることが有意義な留学を達成する方法の一つです。私はこの留学を通して英語教授法に興味を持ち、教育の道に進みたいと決断できる体験が出来ました。

やりたいことを明確に関係者の方々に伝えることで何かしらの機会を得ることに繋がります。教育に興味を持っていると話していたからこそ、表敬訪問の際に、教育省の方々と繋がり、州政府の教育施策の考え方に学ぶことが出来ました。

また留学中には日本や埼玉県について紹介する機会も多く頂きました。その機会を通して私自身が日本や埼玉県を再発見することが多々あり、自分の無知を痛感させられました。

### 最後に

私にこのような機会を与えてくださった埼玉県の皆様、留学前、留学中に相談に乗って頂いた埼玉県国際課の方々、留学中に指導してくださったフィンドレー大学のアドバイザー川村先生並びに日本語講師の青木先生、様々な場面で支援してくださったシペル先生、そして大学での体験を共にしたルームメイトや同期の仲間達、その他多くのお出会った方々に大変お世話になりました。この場をお借りして皆様に感謝申し上げます。